

施設紹介 玉川病院

概要と取り組み



玉川病院は1953（昭和28）年3月に開設され、深い緑に囲まれた閑静な環境にあり、春は桜、秋は紅葉が楽しめ、丘の上にあるので多摩川を一望できます。

病床数381床（2023年3月現在）で一般病棟、回復期リハビリテーション病棟で運営しています。

玉川病院では各種外来を運営していますが、一般診療でも内科系は総合診療科が初診を担当し、総合的な判断をして専門医療につなげています。より専門性の高い医療を提供するために各種センターの開設も行っています。セカンドオピニオン外来では、他院に受診の患者さんを対象に、現在の診断・治療法に関して、当院の専門医が意見・判断を提供致します。

玉川病院ではCT・MRI及び内視鏡などの「高度検査医療機器の共同利用」も行っていて、近隣・地域診療を行っている先生方、及び高度検査医療機器による精査が必要な患者様のために、「検査のみ」を対応する形のシステムを導入しています。救急診療は救急科を中心に年間4,000台以上の救急車を受け入れています。

2019年8月には2名の救急救命士を採用。救急外来やHCU病棟で医師・看護師の指示、監視のもと酸素投与・モニター装着・処置介助等、救急業務が円滑に実施できるように可能な処置の実習に励んでいます。

施設概要

所在地	〒158-0095 東京都世田谷区瀬田4-8-1		
開設年	1953（昭和28）年		
院長	和田 義明	職員数	862人
看護配置	一般病棟 7：1、回復期リハビリ病棟 13：1		
標榜科目	内科、呼吸器内科、循環器内科、消化器内科、神経内科、腎臓内科、糖尿病内科、血液内科、外科、呼吸器外科、消化器外科、乳腺外科、脳神経外科、形成外科、肛門外科、眼科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科、整形外科、腫瘍精神科、リハビリテーション科、歯科、麻酔科、放射線科、病理診断科、リウマチ科、救急科		
センター	透析センター、ヘルニアセンター、気胸研究センター、股関節センター、リハビリテーションセンター、血管外科・静脈瘤センター		



●玉川訪問看護ステーション

1997（平成9）年4月に東京都知事認定を受けて開設しました。病気や障害があり自宅療養をしている方々に看護師がご自宅に定期的に訪問し病状観察、医療処置、介護アドバイスを行っています。

玉川病院、地域の先生、ケアマネージャー等関係職種と連携をしながらサービスの提供を行っています。

“最善・最新の治療を目指す 二子玉川の病院”



玉川病院 院長 和田 義明

日産厚生会玉川病院は地域に根差した救急総合病院ですが、臨床医学研究による公益増進を目的に行動しており、最善・最新の医療を目指し、臨床面はもちろんのこと研究活動・学会発表も継続的に行っています。

当院には特定の疾患に対して研究所付属の研究部門とセンター化した臨床診療部門があります。気胸に関しては創設以来8,000例を超える手術を行い、他病院から難治症例も多く紹介されています。月経随伴性気胸や肺のう胞性疾患のリンパ管筋腫症やBirt-Hogg-Dube症候群という特殊な気胸を発症する疾患の新術式の開発や大学との共同研究も行っています。関節疾患はロボット機能を用い侵襲が少なく精度の高い手術を変形性股関節症だけで年間1,000例以上行い、現在手術総数は8,000例を超え、全国から患者様の紹介を受けています。また、大腿骨近位部骨折や膝疾患も数多く手術しています。鼠径・大腿ヘルニアも腹腔鏡下修復術を主体として、年齢性別に合わせた手術を年間150近く行い、いくつかの研究で学会をリードしています。脳機能障害のリハビリでは新たなリハビリ機器の開発に関し工学系大学などと20年にわたり共同研究をしています。慢性腎疾患に関しても多職種による包括的な疾患進行予防の取り組みや地域での腎疾患対応のネットワークづくりを推進しています。

日常診療では地域に根差す二次救急病院として365日24時間対応し、新型コロナ禍のなかでも年間4,000台を超える救急車を受け入れています。さらに当地域の333の診療所の先生方に登録医になっていただき、日々ご紹介を受け、また、逆にかかりつけ医になっていただくようにご紹介させていただき、地域で包括的に患者様を支

える一翼を担わせていただいております。

また、急性期のみならず、回復期機能も有しており、回復期リハビリ病棟は、現在の仕組みができる前から、病棟単位での脳卒中専門のリハビリを行ってきました。特に脳の障害として起きる高次脳機能障害には力を入れて対応しており、2012（平成24）年より東京都の委託で高次脳機能障害者対応の当地区での中心的役割を担っています。このほか地域包括ケア病棟では急性期治療後に退院を不安なく送れるように必要に応じリハビリを行い、医療が必要な方のレスパイト入院も受けつけています。

このほか、世田谷区の災害拠点病院として、有事の際にはこの地域を医療面で支えるべく、定期的訓練を行っています。新興感染症に関しては、2012年の新型インフルエンザ発生時より、新興感染症対応の協力病院となり、今回の新型コロナ発生時にはクルーズ船患者の受け入れから対応し、当初区内唯一の帰国者接触者外来（発熱外来）を運用しました。その後も新型コロナのいくつかの波の中で重点医療機関として入院診療を行ってきました。

さらには診療だけでなく、研修医、内科専攻医の教育基幹病院として医師を毎年受け入れ、各診療科で若手医師の研修・教育にも力を入れています。

上記のような機能をより充実させることと、よりよい療養環境を形成するために、現在新病棟建設や新たなロボット手術用の医療機器の導入を計画しています。

施設紹介 玉川クリニック

概要と取り組み

公益財団法人 日産厚生会
玉川クリニック

玉川クリニックは、1969（昭和44）年に玉川高島屋ショッピングセンター（S・C）のオープンと同時に同S・C内に開設されました。開設から50年以上を数え、2003（平成15）年に現在の場所に移転し広く地域医療を担っております。東急二子玉川駅から約3分という利便性の良さと親身な診療により患者様から厚い支持を受けています。2023（令和5）年4月からは、日曜を休診日、水曜を診療日に変更し、診療・健診部門の充実を図り、更に地域への貢献を深めて参ります。

診療部門：内科や眼科、皮膚科の診療を行っており、玉川病院と密な連携を取りながら地域住民の「かかりつけ医」としての役割を担っています。また、乳腺、漢方、睡眠時無呼吸症候群の治療、整形、糖尿病など専門外来も行っています。

健診部門：地域住民や近隣の企業を対象に特定健診、長寿健診、入社時健診、定期健診など各種健診のほか、扶養者健診、人間ドック、乳癌検診、子宮検診、予防接種も実施しており今後も予防医学にも積極的に取り組んでいます。

施設概要

所在地	〒158-0094 東京都世田谷区玉川3-15-17 玉川高島屋S・C西館		
開設年	1969（昭和44）年		
所長	長 晃平	職員数	41人
標榜科目	内科、眼科、皮膚科、呼吸器内科、漢方内科	健康診断	人間ドック・各種健康診断



玉川クリニック外観



1Fフロア



マンモグラフィ



胃部X線装置

“日産厚生会 75周年によせて”



玉川クリニック 所長 長 晃平

鮎川義介氏、田川重三郎氏ら設立者たちの高い志と、それを今日まで引き継がれてきたすべての関係者皆様のご尽力により、日産厚生会は75周年を迎えることができました。

今75年を振り返り厚生会の精神や使命などを再確認し、次の25年、100周年に向けた新たな決意を先人にお誓いする節目の年となります。2013（平成25）年の日産厚生会の公益法人化は設立者らの理念を明確化したものであり、厚生会の進む方向性が設立時と何ら変わらないことが示され、「医の実践と研究」を使命として、今日の活動に繋がります。

玉川クリニックは厚生会発足21周年の1969（昭和44）年、玉川高島屋ショッピングセンターのオープンに伴い開設されました。本年で54周年を迎えます。歴代所長や職員の堅実な診療への取り組みにより、クリニックは大過なく今日を迎えております。これは第一にクリニック職員の真摯な患者さんへの姿勢の賜物と考えます。また1年365日、常に後方支援いただいている本院、玉川病院のおかげでもあり感謝にたえません。これから次の四半世紀へ向けてクリニックは公益活動を促進してまいります。

プライマリーケア医療の面からはcommon diseaseについて診療の質の向上、クリニックとしてはじめて経験する疾患ブレイクスルーの蓄積、検査体制の充実、健康の社会的決定因子（SDH）への配慮、予防医学の面からは健診精度の向上、健診結果の受検者フィードバックの精度向上、それらから生まれる臨床研究を確実に実施していきたいと考えます。小澤前所長によりおおよその

土台はつくっていただいておりますので、あとは実行アクションすることが私の役割と思います。

2023（令和5）年4月、健診業務の拡大、職員の働き方改善、経営指標等から玉川クリニックは休日の診療から水曜日の診療へと移行することといたしました。これを新たな発展のチャンスとして進めてまいります。現在非常勤の職員の方々を含め総勢41人でクリニックの診療が行なわれており、皆様のご協力に感謝しております。

クリニック控え室は常に明るく、かしましく、健康的です。その雰囲気を大切にしながら、新たに加わってくださる方々のエネルギーが重なれば、さらなる発展が見込めます。クリニックの診察ブースは最大7つまで拡張可能です。少しずつ使用ブースは増加中ではあるものの現在3ブース程度の使用に止まっています。これを1ブースずつ拡張できるように適正な人材の確保に努めたいと思います。厚生会OBの奮ってのご参加を切に望みます。私の夢は診療ブースの満杯にあります。名前も玉川クリニックです。使用診察ブース数を私自身のクリニカルインディケーターとして今後、年報等で報告いたします。

厚生会の一員として、玉川病院、診療所、佐倉厚生園病院との強い連携を通し、これからも相互理解しながら、One Team、共通の使命感のもとクリニックも活動してまいりますことをお誓いし、75周年にあたっての決意とさせていただきます。



佐倉厚生園病院

概要と取り組み



1942（昭和17）年、結核療養所としてこの地（千葉県佐倉市）に開園し、結核診療を行って参りました。1967年には時代を先読みしてリハビリテーションに力を入れ、現在は回復期・慢性期医療を主に担っております。

国の名勝にも指定された旧堀田正倫庭園（さくら庭園）や国の重要文化財である旧堀田家住宅に隣接する緑豊かな高台に位置しており、恵まれた療養環境のなかで高齢者への良質な医療を提供するとともに充実したリハビリテーションを行い、住み慣れたご自宅に退院できるよう支援しております。退院後もご自宅で安心して生活していただけるよう、訪問診療や訪問看護、訪問リハビリも提供しております。

生活習慣病等の予防医療にも注力し、健康寿命を延ばしていただけるよう各種健康診断や人間ドックの受け入れも積極的に行っております。

施設概要

- 所在地** 〒285-0025 千葉県佐倉市錦木町320
- 開設年** 1942（昭和17）年
- 院長** 長尾 建樹 **職員数** 311人 **病床数** 181床
- 看護配置** 療養病棟 20：1、回復期リハビリ病棟 13：1
- 標榜科目** 内科、呼吸器内科、消化器内科、脳神経内科、代謝内分泌内科、血液内科、循環器内科、整形外科、リハビリテーション科、脳神経外科
- センター** 健診センター



● 厚生園訪問看護ステーション

1998（平成10）年に在宅支援の事業所として開設。住み慣れたご自宅で安心して療養いただけるよう、かかりつけ医師と連携しながら定期的にご家庭に訪問し、医師の指示に基づく処置や報告のほか、介護の援助及びアドバイスなどを行っております。

“佐倉厚生園の現況と展望”



佐倉厚生園病院 院長 長尾 建樹

私は2021（令和3）年7月に佐倉厚生園病院院長に就任しました。日産厚生会の一員となってまだ日も浅いこの時期に75周年の節目を迎え、改めてその伝統の奥深さゆえに運営の重責を実感しています。

院長就任時より、この長い歴史を引き継ぎ発展させるために、積みあげられてきた伝統をもとに新たな創造を行い、常に次世代を見据えながら社会に適応し貢献できる施設として地域において確固たる地位を維持することに努めてまいりました。そして具体的な中期目標として以下の2つを掲げてまいりました。

公益事業化

これには日々の診療や介護だけではなく研究の継続と発信が重要であり、各職種において問題意識、疑問など自由闊達な議論の場を作り、新たな研究テーマを創造できる環境整備とともに、発信を促進し自分たちの研究が社会に貢献している実感を持つことで新たな研究へのモチベーションを高めていきたいと思っております。

収支の安定化

佐倉厚生園グループの地域医療における役割は急性期治療を終えた患者さんが仕事に復帰できるように、また、住み慣れた自宅で自立して暮らせるように、リハビリテーションを中心とした回復期医療を提供することです。また、在宅で療養されている方が、軽症から中等症の疾患により入院加療が必要になった時に対応し、加療後自宅へ復帰させたり、重症化するようなら基幹病院にお願いするなど高度急性期医療と在宅医療の中間的な立場を担っています。

このような立場で診療実績を上げるために重要なのは

近隣の基幹病院や開業の先生方とのスムーズな連携により当院への紹介を増やすことであり、良質な医療や介護の提供はもとより、各医療機関の求めに即応できる診療体制や患者さんに対する接遇の改善も重要であり、現在まで実践してきました。また、退院患者さんの継続治療を近隣の開業の先生方にお願ひし、両方向への積極的な紹介がスムーズにできるよう心がけています。加えて、収支の改善にはエネルギー削減や物品購入コスト見直し等、無駄を省く必要もあり、収支改善チームにより数値目標を決め積極的取り組んでいます。

2022年度は、老健、病棟でクラスターが発生したにもかかわらず増収することができ収支が改善してきたことは現在までの取り組みが効果を表してきたものと確信しています。

これらの目標達成の原動力は人、すなわち職員であり、医療人として、そして佐倉厚生園職員としてのモチベーションを高めるためには、この地におけるわが施設の歴史と成果を知り、佐倉厚生園の理念である真心と信頼のもと治療を受け退院して地域へ戻られた患者さんの無上の喜びを体感することで地域医療における我々の重要な存在意義を理解し、誇りを持つことだと考えます。そのうえで、当院の伝統を感じ新たな創造の意欲を高め、ここで働いてよかったと感じてもらいたいと思っております。

中期の目標を達成し得た後には、長期の目標として新病院の建設に向けて職員のモチベーションがさらに高まることを期待しています。

施設紹介 佐倉ホワイエ

概要と取り組み



1990（平成2）年、佐倉厚生園に併設となる老人保健施設「佐倉ホワイエ」を開設、要介護者の心身の自立を支援し、病状が安定しリハビリテーションを必要とされる方の受入れを行っております。2000年介護保険制度の施行により介護老人保健施設に変更となり、病院同様、住み慣れたご自宅で安心して過ごしていただけるよう、医師による医学管理の下、看護・介護のケアはもとより理学療法士や言語聴覚士等によるリハビリテーション、栄養管理・食事・入浴などの日常サービスまで併せて提供する施設です。

明るく家庭的な雰囲気、地域やご家庭との結びつきを大切にしながら運営を行っております。また通所サービスとして、デイケアにも注力し要介護者の退院・退所後の機能維持回復訓練や日常生活動作訓練が受けられ、自宅での生活を支えるお手伝いをしております。

施設概要

- 所在地** 〒285-0025 千葉県佐倉市錦木町336
- 開設年** 1990（平成2）年
- 施設長** 遠山 正博
- 職員数** 82人
- 入所定員** 80人



佐倉ホワイエ外観



デイケア外観



デイケア室内

●厚生園ケアマネジメントセンター

2000（平成12）年の介護保険制度の施行により居宅支援事業所を開設し、要介護認定を受けて介護を必要とされる方が、自宅で自立した生活を送ることが出来るように、必要なケアプランの作成や介護サービスの連絡や調整、介護相談、介護保険に関する申請の代行等をケアマネージャーが適切に行っております。

“介護老人保健施設 佐倉ホワイエの歩むべき道”



介護老人保健施設佐倉ホワイエ 施設長 遠山 正博

介護老人保健施設佐倉ホワイエは、病院と在宅の中間リハビリテーション施設として1990（平成2）年に設立されました。目的として病院退院後、安定した日常生活を送れるようにリハビリをするということでした。現在でもその趣旨は変わっていませんが、超高齢時代を迎え、存在意義がだいぶ変わってきて、長期療養施設としての役割も加わっています。最近は見取り介護まで求められるようになってきました。佐倉ホワイエは創設時のリハビリテーションを主として、厚生園グループの理念「真心と信頼」を基本として、活動を続けていきたいと思っております。

現在ホワイエでは、立ち上がり、歩行など基本動作を中心に、理学療法士、作業療法士が活動しており、座位保持、車いす操作などとともに、安定した日常生活を送れるようリハビリを施行しています。またホワイエの特徴として、言語聴覚士を多く配置しています。嚥下困難で鼻腔チューブや胃瘻を挿入されたまま入所された利用者には嚥下訓練を施行、経口摂取ができるようになるように努めています。今後もホワイエの強みを生かしたりリハビリを続けていきたいと思っております。

2024（令和6）年から業務継続計画（Business Continuity Plan：BCP）が、全介護事業所に義務付けられます。老健施設では施設基準にも取り入れられることになっています。BCPとは「平常時の対応」「緊急時の対応」の検討を通して、①事業活動レベルの落ち込みを小さくし、②復旧に要する時間を短くすることを目的に作成される計画書です。佐倉ホワイエは、岩盤のしっかりした下総台地の高台の上に建てられており、自然災害

は受けにくいところですが、異常気象の続く昨今、考えられる災害を検討していく必要があります。

もう一つの災害として感染症対策があります。昨年新型コロナウイルスのクラスターに襲われ、大変な苦勞をしました。老健施設では、病院ほど医療機能は整えられておらず、少ない陣容で対応せざるを得ませんでした。酸素や吸引の配管もなく、隣接する佐倉厚生園病院にも直接的支援をお願いするわけにもいかず、約50人にも及ぶクラスターになってしまいました。新型コロナ患者が発生した時の手順はあらかじめ準備されていましたが、現実には感染速度が非常に早く、徘徊する認知症患者の対応も遅れて、ワクチン接種の有無は関係なく拡大していきました。今回のクラスターは、今後のBCP作成にあたり非常に多くの教訓を残しました。

今後の老健のあり方としては、まず経営状態の安定化が第一に考えられます。今回の新型コロナウイルスの大流行では、老健施設とデイケアの影響が一番大きかったとの統計も出ています。まさにBCPをしっかりと作成し、何があってもすぐ立ち直れる経営基盤を作ることが重要だと思っております。強化型老健、介護医療院への発展はその後にくる問題だと考えます。

公益財団法人日産厚生会の一員としては、日常の老健施設としての活動では公益認定は難しいので、課題を抽出し、研究、発表、論文作成などの活動を奨励し、なるべく早く公益部門としていただくよう努力してまいります。



日産厚生会診療所

概要と取り組み



日産厚生会診療所は、1940（昭和15）年に株式会社日産の厚生課事業として、内幸町の防長クラブ内に健康相談所として開設されました。現在は、港区西新橋の官公庁・ビジネス街で外来診療と各種健康診断の2つを柱として、地域住民や企業で働く人たちの医務室的役割で医療を提供しています。

地域医療を担う外来診療部門は、内科、外科、耳鼻咽喉科のほか労災の医療機関として指定されています。

予防医療を担う健康管理部門は、人間ドック、生活習慣病健診、定期健康診断、入社健診をはじめとする各種健康診断や健康相談、産業医活動など幅広く行っています。

施設概要

所在地	〒105-0003 東京都港区西新橋1-2-9 日比谷セントラルビル2F		
開設年	1940（昭和15）年		
所長	川村 徹	職員数	25人
標榜科目	内科、外科・耳鼻咽喉科		
健康診断	人間ドック・各種健康診断		



日比谷セントラルビル外観



エントランスホール



健診待合スペース



耳鼻咽喉科診療室

“伝統の地域とともに 信頼される良質の医療を”



日産厚生会診療所 所長 川村 徹

伝統的な地で職域のニーズに合致した 医療を提供する

新橋・虎ノ門地区という日本屈指のオフィス街、日比谷通り沿い内幸町駅に隣接する高層ビルの2階で診療を行っています。この地は1934（昭和9）年日産コンツェルンにより「日産館」が建設された由緒ある地であり、その後「物産館」と改められ、1983年に日比谷セントラルビルが竣工され、現在に至ります。北に日比谷公園、北西に霞が関官庁、南西に愛宕山、北東の有楽町から銀座まで徒歩圏内です。

各種健康診断（企業健診や人間ドック）とワクチン接種および巡回健診を実施する健康管理部門と内科、耳鼻咽喉科、外科を標榜する外来部門を2本柱として地域医療に貢献しています。日産厚生会の伝統を受け継ぐ診療所周辺の職域は、女性活躍推進社会、働き方改革、ワークライフバランスなどをキーワードとして目まぐるしく変化しています。職域ニーズに合致した医療を提供するため、職員全員が日々研鑽を積んでいます。

予防医療（Preventive Medicine）の 調査・研究と実践、を遂行する

日産厚生会が目的達成のために行う事業のひとつに、「生活習慣病の予防、早期発見に関する調査・研究と実践」があります。2020（令和2）年からのウイズコロナ時代においては、予防医学を担う健診業務の重要性が再認識され更なる質の向上とサービスの充実が要求されています。年齢層30～60歳代がほとんどを占めるこの職域では、将来生活習慣病を発症させない予防医療の重要性が注目されることは当然です。健診機関が企業や健保組合から期待される役割に従業員の生活習慣病健診とがん検

診のハイブリッドの任務があり、両者の精度向上を図っていくことが重要です。2023年に新しい総合健診支援システム機器の入れ替えを行いさらに実績を積んでいきます。健診で指摘された生活習慣病治療がシームレスに外来診療へ繋がるようなシステム作りも行っています。

医療知識の啓発を通じ職域に貢献し、 専門知識を有する人材を育成する

職域で働く人のヘルスリテラシーを高める啓蒙活動として企業において健康講話や講演を行い健診結果について理論的な保健指導や健康相談をする産業医や保健師の活動は大切です。職域に広く浸透しながら、専門職の人材育成を行う必要があります。

生活習慣病の治療には糖尿病や脂質異常症を診察する糖尿病・代謝内科と高血圧、動脈硬化や心疾患を専門的に診る循環器内科のさらなる充実が必要です。周辺の医療機関と連携し大学病院から人材を招聘し職域の“かかりつけ医、の役割を果たします。

ワークライフバランスを考慮した 職場環境にする

ワークライフバランスを考慮した働きやすい職場環境を構築していきます。リスクマネジメントの観点から職員が所内の様々な業務に対応できるよう「マルチスキル化」を推し進め、健康管理部門と外来診療部門の業務効率化と看護職の統合によるスリム化を実現しました。ワークライフバランスの向上を推し進めるとともに、職員全員が接遇のクオリティを高め、コミュニケーションスキルを磨き意見や要望を訴えやすい関係性を築くこと、思いやりのあるサービスを提供することにもより一層注力していきます。

2013（平成25）年12月に、日産厚生会は内閣府の認可を得て財団法人から公益財団法人へと移行しました。「公益財団法人とは学術、技芸、慈善、その他の公益に関する事業において不特定かつ多数の利益の増進に寄与する組織として活動する」ことが目的となったわけです。

翌年の2014年4月に医学研究所が設立され、従来各診療科が個別に研究活動をしていたものを統合し発展させてゆく組織となりました。現時点では玉川病院が公益部門であり、他の3施設は収益部門として位置付けられています。即ち、公益部門は研究活動が盛んに行われている部門、収益部門は地域医療をもっばら行う部門として活動していますが、最終的にはすべての施設が公益部門になることを目指しています。

診療活動だけでなく研究活動も行い日本国民の健康増進に寄与することが私たちの責務であり、医学研究所はすべての部門およびすべての職員に対して臨床研究の奨励・支援・人材育成を行う機関として使命を果たしています。具体的には、研究者に対して柔軟な発想を生み出す環境作り、および活動するための資金提供、そして高い倫理観に基づいた規範作りを行い活動してもらうことが重要になります。また研修医には、研究マインドを根底において診療活動にあたることの重要性を指導することが役割となります。コメディカルへも同様な支援を行っています。

施設概要

- 所在地** 〒158-0095 東京都世田谷区瀬田4-8-1（日産厚生会 玉川病院内）
- 開設年** 2014（平成26）年
- 所長** 松原 正明



各施設の研究実績は医学研究所発行の年報に掲載される

医学研究所が主催する医学フォーラムの案内



医学フォーラム（写真は2016年2月27日開催の第2回医学フォーラム）

“日産厚生会における今後の25年”



医学研究所 前所長 栗原 正利

日産厚生会が創立75周年を迎えることとなった。75年前を紐解いてみると、日本が戦後混乱期の真ただ中にあった時代。貧困に喘ぎ、そして戦前の価値観がひっくりかえってしまった時と言える。

そんな時代に日産コンツェルン創始者である鮎川義介氏が、私財を投じて佐倉に結核療養所を建て、その後、瀬田に玉川病院を建てたのが始まりと伺っている。肺結核症が死亡率の上位を占め、まだ不治の病として扱われた時代であった。その後の経済成長とともに、玉川病院も総合病院へと発展していったわけである。しかしながら、経営危機を二度ほど経験した時があった。1回目の危機は、1960（昭和35）年頃で玉川病院の土地の一部を売却して経営を安定させた。2回目の危機は昭和60年代のバブル期で看護師不足のため病棟を閉鎖せざるを得なかった時だった。その後バブルの終焉とともに看護師不足も改善され経営は安定したわけである。

2013（平成25）年に日産厚生会は内閣府の認可を経て財団法人から公益財団法人になった。それとともに2014年に医学研究所が設立された。今後の日産厚生会の方向性はここで明確になったのである。病院の公益財団法人は研究業績を挙げながら地域医療を支えて国民の付託に応えるという、言わば「創造的診療活動」をしてゆくことが使命となったわけである。

今後、どのように日産厚生会は進んでゆくのであろうか。答えは比較的易しい。

この「創造的診療活動」を進めるためには、二つの山を乗り越えなければならない。それはどの経済活動にも共通した問題であるが、日本の深刻な少子高齢化とそれに伴う経済活動の縮小である。創立100周年までの25年間は日産厚生会もこの影響を避けることができない。

その対策として女性医師の活用と外国人スタッフの活用が大きく取り上げられることは間違いない。現在、医学部の多くは女子学生の割合が40%に達している。今後も女子学生の割合は増加することが予想される。10年後には彼女らが医療現場で中心となって実力を発揮する時代が来る。一方、日本は少子高齢化による労働力不足のため、外国人スタッフを雇用する機会も増えてゆく。特に外国人看護師は増加すると予想される。

中国の友人によると、看護師として日本で働くことを希望している学生は非常に多く、しかも優秀な人材が多いと聞いている。中国では地方出身の看護師が大都市の病院で働くことは非常に難しいからである。フィリピンも海外で勤務している看護師が非常に多い。現在は米国、カナダ、中近東諸国で勤務しているが、いずれ日本に市場を求めてくると予想される。私の知るフィリピン看護師達も非常に優秀である。さらに、最も注目されているのはインド人で、理数系に強く英語も話せ非常にモチベーションも高い。日本の医師や看護師の国家試験が英語でも受験可能となった時には、彼らも仕事を求めて来日するであろう。日本の病院は近い将来こうした国際色豊かなスタッフによって維持されてゆくに違いない。逆に、日本の若者の海外への関心は非常に低く、経済産業省の調査では海外で働きたいと思う新入社員は40%を割っていると言う。TOEFLのスコアランクもOECDの中で最下位である（2019年資料）。いつから日本人は国際化に対応できない人材になってしまったのであろうか。今後25年は少子高齢化のため女性スタッフと外国人スタッフの活用が問われる時代になると予想している。日産厚生会の75周年は、そうした未来像にかじ取りをする好機と捉えたい。

職員研修発表会開催実績 (1986年～2014年)

- 第1回** 1986年1月23日開催
演 題 「排泄自立への援助」
「医事専用コンピューター導入による合理化」 他2演題
会 場 玉川病院講堂
- 第2回** 1987年6月18日開催
演 題 「外来患者さんからアンケートを得て～外来看護の一考察～」
「地域医療機関との連携医療について」 他2演題
会 場 玉川病院講堂
- 第3回** 1988年6月23日開催
演 題 「地域活動 ―MSWの立場から―」
「待ち時間の短縮によるサービスの向上」 他4演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第4回** 1990年1月25日開催
演 題 「対麻痺患者を在宅に向けて指導―その中で学んだこと」
「糖尿病患者に対する栄養指導」 他2演題
会 場 玉川病院講堂
- 第5回** 1991年6月27日開催
演 題 「血液透析患者の看護―退院に向けての食事療法―」
「歯周病の予防について」 他3演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第6回** 1993年1月28日開催
演 題 「外来患者サービス改善について」
「健診・人間ドックの業務改善について」 他4演題
会 場 玉川病院講堂
- 第7回** 1994年6月23日開催
演 題 「ドック営業の成果とドックシステムの研究」
「コンピューター導入後のドックの現状」 他4演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第8回** 1996年1月25日開催
演 題 「「患者サービス委員会」活動報告」
「健診請求書のコンピューター化」 他5演題
会 場 玉川病院講堂
- 第9回** 1997年6月26日開催
演 題 「物品管理コンピューターの導入及びこれからの展望」
「門前薬局が調剤薬局として独立していく過程」 他4演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第10回** 1999年1月28日開催
演 題 「グループワークにおける園芸活動の導入とその効果」
「片麻痺患者の排便コントロールの記録改善を試みて」 他4演題
会 場 玉川病院講堂

- 第11回** 2000年6月29日開催
演 題 「介護保険と老人保健施設レセプト請求について」
「健診業務のシステム化」 他5演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第12回** 2002年1月24日開催
演 題 「病院リスク、その見（診）えるもの、みえないもの」
「服薬指導・DI業務の現状と課題」 他4演題
会 場 玉川病院講堂
- 第13回** 2003年6月26日開催
演 題 「玉川病院リハビリテーション科の地域医療への取り組み」
「セルフケアが出来ない患者の口腔内環境の見直し」 他3演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第14回** 2005年1月27日開催
演 題 「肺結核のクリニカルパスの構築」
「おむつのスペシャリストを目指して」 他5演題
会 場 玉川病院講堂
- 第15回** 2006年6月22日開催
演 題 「病棟におけるホスピタリティー（訪問者を丁寧にもてなす）」
「薬剤管理の「過去」→「現在」→「未来」」 他5演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第16回** 2008年1月24日開催
演 題 「遊びリテーションに取り組んで～さらなる充実をめざして～」
「手浴の改善～「浴」とはなにか～」 他6演題
会 場 玉川病院講堂
- 第17回** 2009年6月25日開催
演 題 「急性期病院における排泄ケアの見直し～現状と今後の課題～」
「より良い入浴環境を求めて」 他11演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第18回** 2011年1月27日開催
演 題 「ピクトグラムを活用した情報共有」
「ナースコールシステムを用いた排泄ケアの評価～援助へのニーズの先どりを評価する～」 他12演題
会 場 玉川病院講堂
- 第19回** 2012年6月28日開催
演 題 「接遇力の向上」
「デイケア利用者増への取り組み～高齢者を支える施設を目指して」 他9演題
会 場 佐倉厚生園庭園記念館
- 第20回** 2014年1月23日開催
演 題 「3.11を振り返って～私たちの取り組むべき課題～」
「近隣施設との簡易懸濁法導入に向けた取り組み」 他11演題
会 場 玉川病院講堂

医学フォーラム開催実績 (2015年～)

第1回	2015年3月26日開催
テーマ	医の実践と研究
会場	東京コンファレンスセンター・品川 アレア品川 5階大ホール
特別講演	「日本の医師、病院、医療」
講師	前ジョンソン・エンド・ジョンソン最高顧問 現カルビー株式会社代表取締役会長兼CEO 松本 晃
第2回	2016年2月27日開催
テーマ	医の実践と研究「～見る・聴く・伝える～」
会場	東京コンファレンスセンター・品川 アレア品川 5階大ホール
特別講演	「医療と医療小説の未来」
講師	作家 海堂 尊
第3回	2017年2月18日開催
テーマ	殻を突き破れ!!
会場	東京コンファレンスセンター・品川 アレア品川 5階大ホール
特別講演	「サービスを超越る瞬間」
講師	人とホスピタリティ研究所代表 高野 登
第4回	2018年2月3日開催
テーマ	“育む医療、温かい医療”
会場	東京コンファレンスセンター・品川 アレア品川 5階大ホール
特別講演	「キューバの予防と代替医療に学ぶ ～ラテン流のポジティブ思考で健康長寿を実現～」
講師	長野県農業大学校総合農学科教授 吉田太郎
第5回	2019年2月9日開催
テーマ	新時代に向かう
会場	東京コンファレンスセンター・品川 アレア品川 5階大ホール
特別講演	「日本の医療ビッグデータの構築」
講師	日本医師会常任理事 石川広己
第6回	2020年2月15日開催
テーマ	令和医新
会場	※新型コロナウイルス感染症拡大のため会場での開催は中止。一般演題等の抄録をまとめた「医学フォーラム報告集」を発行
特別講演	「医療職の働き方改革」 ※講演中止
講師	日本看護協会会長 福井トシ子 ※講演中止
第7回	2021年6月開催
テーマ	コロナと医療改革
会場	You Tube によるオンデマンド配信 視聴期間 2021年6月5日～6月19日
特別講演	「患者と医療者が協働する医療を目指して」
講師	認定NPO法人ささえあい医療人権センター COML 理事長 山口育子
第8回	2022年2月開催
テーマ	—医療と新しい働き方—
会場	You Tube によるオンデマンド配信 視聴期間 2022年2月19日～3月5日
特別講演	「男女共同参画は医療を変えるか？」
講師	社会学者・東京大学名誉教授 認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長 上野千鶴子
第9回	2023年2月4日開催
テーマ	私たちのSDGs
会場	東京コンファレンスセンター・品川 アレア品川 5階大ホール
特別講演	「マクドナルドの経営戦略とSDGs」
講師	日本マクドナルドホールディングス株式会社代表取締役社長兼CEO 日本マクドナルド株式会社代表取締役社長兼CEO 日色 保